

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K03022

研究課題名（和文）江戸時代の藩校における音楽教習・楽実践から楽思想構築に至る楽文化の総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Music Culture from Music Lessons and Music Practices to Construction of Music Philosophy in Domain Schools in the Edo Period

研究代表者

武内 恵美子（TAKENOUCHI, Emiko）

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・准教授

研究者番号：30400518

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代に全国で230校あった藩校では様々な教科が教習されていたが、わずか6校のみが音楽を教科として教習していた。水戸藩校弘道館・熊本藩校時習館・弘前藩校弘道館・高松藩校講道館・赤穂藩校博文館・佐倉藩校正徳書院の6校である。

これらの藩校を調査したところ、3つに分類できた。第1に、他藩の見本となる存在であった藩校である。それが水戸藩校と熊本藩校であった。第2に、1の藩校の影響と徂徠学派の影響が見て取れた藩校である。それは弘前藩校と高松藩校であった。第3に、独自の形態であると考えられた藩校で、赤穂藩校と佐倉藩校であった。第2第3は開校時の責任者の方針が大きく作用すると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸時代に急速に普及した儒学は、武士を含め庶民に至るまでの思想的・精神的・生活的基盤となっていたが、その根幹にある礼楽思想の「楽」をどのように捉え、探求し、実践してきたのかは、従来ほとんど研究されておらず、近年になってようやく検討されるようになってきた分野である。特に江戸時代の藩校における楽の教習は、本来儒学教育には必要な科目であったはずであった。その在り方を解明することで、音楽教習の在り方とともに、江戸時代の儒学教育の在り方についても提案ができたと考える。

研究成果の概要（英文）：During the Edo period, there were 230 hanko (domain schools) throughout the country that taught various subjects, but only 6 of them taught music as a subject. There are 6 schools: Mito Domain Kodokan, Kumamoto Domain School Jishukan, Hirosaki Domain School Kodokan, Takamatsu Domain School Kodokan, Ako Domain School Hakubunkan, and Sakura Domain School Tokushoin. After researching these domain schools, it was able to classify them into three categories. The first is the domain school, which served as a model for other domains. These were the Mito and the Kumamoto. Second, it is a domain school where the influence of the Mito and Kumamoto schools, and the influence of the Sorai school can be seen. They were the Hirosaki and the Takamatsu. The third was the domain schools, which were considered to be unique forms, the Ako and the Sakura. The second and third, it was thought that the policy of the person in charge at the time of opening the school had a great effect.

研究分野：音楽学

キーワード：藩校 儒学 礼楽思想 音楽教習 積奠 雅楽

1. 研究開始当初の背景

これまで、江戸時代の各藩で実施されてきた藩校での教育内容については、全体の枠組みまたは、各藩個別の検討はなされてきた。また儒教や武術などの特定の分野に対する個別研究は行われてきたが、藩校における音楽教習については、ほとんど研究されてこなかった。『日本教育史資料』で各藩の教育内容が示される中に音楽の項目が挙げられる他は、ほぼ拙稿の他には未見であった。

2. 研究の目的

藩校における音楽教習の状況、目的、意図、意義などを調査研究することで、江戸時代の藩校教育における音楽がどのように認識されていたのかを解明することを目的とした。藩校における音楽教習は、単に音楽を学習するというを超えて、儒教における礼楽思想の「楽」の実践をどのように捉えていたのかを理解する手段となり得ると推測されるためである。

3. 研究の方法

『日本教育史資料』における各藩の状況を調査し、音楽教習を実施していた藩校を抽出、その藩を中心として各藩の藩校に関する資料を調査し、音楽教習の実態を明らかにする。各藩の状況が確認した際、関係する藩や当該藩の周辺にある著名な藩校の影響を多大に受けていることが確認できる場合には、それらの藩との音楽教習の関係も調査し、その実態を解明する。

4. 研究成果

4.1 概要

明治初期に旧幕体制の教育状況を調査し、明治25年(1892)から27年(1894)にかけてまとめられた『日本教育史資料』に掲載された、全国230校の藩校のうち、音楽教習を行っていたことが記載されているのは、水戸藩校弘道館・熊本藩校時習館・弘前藩校弘道館・赤穂藩校博文館・高松藩校講道館・佐倉藩校正徳学院のわずか6校であった。

藩校名	水戸藩校弘道館	熊本藩校時習館	弘前藩校弘道館	高松藩校講道館	赤穂藩校博文館	佐倉藩校正徳学院
内容	笙、笛(中略)ヲ学習シ孔廟及祖廟ノ祭祀ニ供ス	定日ヲ以時習館ニ於テ教授ス	皇漢学筆道算法医学習礼兵楽雅学及(後略)	音楽武家ノ礼式教習等八各日ヲ別テコレヲ勉ム	博文館ニ於テ毎日ヲ立之ヲ習ハシム	音楽所ニ於テ二回合奏

4.2 大藩の教習 水戸藩校弘道館・熊本藩校時習館

水戸藩校弘道館と熊本藩校時習館は、規模・教育内容ともに最大級の藩校として知られる名門である。他藩校への影響は絶大であったと推察される。ここでは簡単に概要を述べておく。

4.2.1 水戸藩校弘道館

水戸藩校弘道館は9代目藩主徳川斎昭により、藩の改革の一環として天保12年(1841)に創設された。初代教授頭取には会沢正志斎・青山拙斎が据えられた。天保12年は仮開館で、以後も整備が行われ、天保14年(1843)には医学館が設置、安政4年(1857)に完成した。

教育内容は文武わたり、文としては儒学・歴史の他、歌学・天文学・数学・地理・音楽などの教科が設置された。独自の教育方針を打ち立て、水戸学として他藩への影響は甚大であった。

4.2.2 熊本藩校時習館

熊本藩校時習館は8代藩主細川重賢(1721-1785)により、細川内藤家当主の長岡忠英(1699-1772)を総教、秋山玉山(1702-1764)を教授に据えて宝暦5年(1755)に設立された。翌宝暦6年には医学館である再春館も設置された。文武の教科が置かれ、文では儒学、漢学、書学、修学、音楽、天文学、数学などの教科が設置された。他藩からの遊学者も積極的に受け入れる体制をとり、他藩へ多大な影響を与えた。

4.3 大藩の影響と徂徠学 弘前藩校弘道館・高松藩校講道館

4.3.1 弘前藩校弘道館

弘前藩主津軽氏は初代より文道を好み、4代目藩主津軽信政(1647-1710)は山鹿素行(1622-1685)に師事し素行の門人が藩に召し抱えられた。津軽藩の宝暦改革の中心人物である乳井貢(1712-1792)にも素行の思想的影響がみられるなど、その影響は多大であったとされる。6代藩主津軽信著(1719-1744)の代に、大阪の懐徳堂で助教を努めていた五井蘭洲(1697-1762)を一時召し抱えるが、思想的に大きな影響を与えることはなかった。7代藩主信寧(1739-1784)は戸沢惟顕(1710-1773)を召し抱え、戸沢は8代藩主信明(1762-1791)の守役を努めた。8代藩主信明は戸沢の後、荻生徂徠門下の宇佐美瀧水(1710-1776)に師事し熊本藩6代藩主細川重賢(1721-1785)を介して松平定信と懇意となっていた。寛政3年(1791)には4代目藩主信政

から続いていた城中講釈の定例化を整備、藩校設立を検討していたが、同年急死したため遺言として託した。9代藩主寧親（1765-1833）は寛政6年（1794）に学校設立の総責任者として津軽永孚（1773-1828）を任命し、昌平坂学問所や熊本藩校時習館を帰藩として寛政8年に学舎が完成、稽古館と名付けられ、同年8月から授業が本格的に開始された。寛政9年には積奠も実施、以後毎年実施された。文化5年（1808）凶作と蝦夷地警固による財政難のため、規模縮小の上場内に移転し、科目を経学・書学・算学に限定した。その後も規模縮小は続き、慶応2年（1866）及び3年（1867）に教科の取り消し及び変更等規定改正が行われた。寛政8年の稽古館設立当初の設定教科は、経学・兵学・紀伝学・天文曆学・数学・書学・法学・武芸・医学・楽であり、安政6年（1859）には蘭学が追加された。開設当初は徂徠学的傾向が強かったが、津軽永孚が退くと次第に徂徠学から朱子学へと改められていったが、楽の教習は慶応2年まで実施されていた。

弘前藩校稽古館は、開設当初の徂徠学の傾向と、それ以前からの熊本藩校稽古館の影響が色濃く、楽の教習もそのあたりに由来すると考えられる。

4.3.2 高松藩校講道館

高松藩の藩校は、2代目藩主松平頼常（1652-1704）が元禄15年（1702）に講堂を建て、林家の門人であった菊池舎人、荻生徂徠門人の岡井郡太夫を招いて積奠を実施、藩儒十河順安と根本弥右衛門に藩士の学問教授に当たらせたとに始まり、3代目藩主頼豊（1680-1735）まで続くが、後菊池武雄（1659-1720）や雨森三哲（1667-1722）の招聘講義なども実施されるが、学問所としては一時衰退する。4代目藩主瀬桓（1720-1739）は元文2年（1737）に青葉士弘を藩儒に迎えて講義を継続していた。6代藩主頼真（1743-1780）は安永8年（1779）に学館を建設して講道館と名付け、後藤芝山（1721-1782）を藩儒に据えて規模を拡大、翌安永9年（1780）に開設した。9代目頼恕（1798-1842）は天保3年（1832）に聖廟を建設し、さらなる拡大を図ることに尽力した。

高松藩は古くから徂徠学派との関係があることが楽の教習につながる1つの要因とも考えられるが、一方で水戸学との関係も指摘されている。その傾向は、弘前藩校弘道館と同様の傾向としてみることもできるのではないかと考える。つまり、徂徠学の影響と水戸・熊本藩という大藩の影響という状態を見ることができないのではないかとということである。他にもこの傾向がみられるかを今後調査していきたい。

4.4 独自の形態 赤穂藩校博文館・佐倉藩校正徳学院

4.4.1 赤穂藩校博文館

赤穂藩では、森家の二代目藩主森長直（1673-1722）の代に学問所を設けたが、家中で儒学の經典を購読する程度で、開かれた学問所ではなかった。5代目藩主森忠洪（1728-1776）の代の延享4年（1747）に赤松滄洲（1721-1801）を藩儒に登用したことで、藩校設置の要望が出されるが、財政難のため許可されなかった。結局安永5年（1776）に藩校設置が許可され、翌安永6年（1777）に校舎が完成し、6代目藩主森忠興によって「博文館」と命名された。寛政9年（1797）には「講堂壁書」「学寮控」などの校内規則が制定される、安政5年（1853）には村上天谷（1798-1863）によって改革案が示され、講堂や学内施設の修繕が行われるなど、天保の飢饉以来財政難であった藩の状況でありながら、藩校の維持が図られていた。

赤穂藩校は熊本藩校時習館、水戸藩校弘道館の影響は見受けられない。赤穂藩校で大きく働いたのは赤松滄洲の影響であろう。

赤松滄洲は播州三日月の出身で、17歳の時に赤穂藩医大川耕斎の養子となり、延享4年（1747）25歳で赤穂藩儒となった人物である。若年期に京都へ遊学し、医学を香川修庵（1683-1755）儒学を宇野明霞（1698-1745）について学習した。儒学の師である宇野明霞は折衷学派であり、京都で弟とともに平安二字先生と称された儒家であった。赤松滄洲自身は柴野栗山（1736-1807）皆川淇園（1735-1807）らと交友を結び、特にこの2名とは後に三白社という詩社を起こすほどの仲であり、程朱の学を修めた儒家として並び称される人物である。しかし、寛政異学の禁が発令された際、その実施役であった柴野栗山に論難の書を送り、異学の禁が不当であることを訴え、以後交友を断った。

赤松滄洲は宝暦13年（1763）息子の蘭室（1743-1797）に藩儒の職を譲り隠居して京都で文人としての生活を送るが、藩主の命によりしばしば帰藩、江戸藩邸への出府も行っており、蘭室とともに藩校の設立・維持に尽力した。安永5年の藩校蘭室は特に藩校教授を務める傍ら督学も兼ね、さらに勘定方の取締りとして藩財政の確立にも尽力したことで知られている。

赤穂藩校博文館で音楽教習が加えられた理由については、設立に関する文献には触れられていないが、赤松滄洲・蘭室父子の影響が甚大であることを勘案すると、この父子に依るところが大きい可能性が高いと推察される。赤松滄洲が朱子学寄りであったとはいえ、師である宇野明霞が折衷学派であったこと、柴野栗山との寛政異学の禁のやり取りを見る限り、折衷学派寄りの、楽の実践を試みた可能性があるのではないかと考えられる。

4.4.2 佐倉藩校正徳書院

佐倉藩では、寛政4年（1792）に堀田家2代藩主正順（1745-1805）によって学問所が開設された。文化2年（1805）に「温故堂」と改名された。さらに天保4年（1833）に、5代藩主正睦（1810-1854）によって藩政改革が行われた際、文武の振興を図って「文武芸術の制」を定め、藩校の拡大をいじって学問所の場所も移転し、天保7年（1836）に「成徳書院」と改名して、新たに教育を行った。以後、成徳書院では、朱子学、武術、蘭学を中心とした教育が行われたが、具体的

には、「成徳書院職掌記」に挙げられている組織図から、教育内容を見ることができる、それによると、儒学を学ぶ温故堂の他、書院内付属として、礼節・音楽・書学・数学・射御を教授する六芸所が設置された。ただし、礼節・書学・数学に関しては、正徳南庠・正徳北庠および初頭教育を担当する西塾・東塾にも内付属として設置されているが、音楽に関しては明記されておらず、どの程度教習が実施されていたのかは不明である。（下記「成徳書院職掌記」書院名目『佐倉市史 巻2』掲載図参照）しかし、「正徳書院職掌記」の「職名位次」の六芸所にも「礼楽射御書数」とあることから、音楽が教習科目に入れられていたことは確かであることがわかった。

また、『日本教育史資料』には「音楽所」とあることから、別途音楽所が設置されていたことも推察されたが、組織図等からは見いだせなかった。

佐倉藩は学問教育に熱心な藩として知られており、正徳書院開設を命じた5代目藩主堀田正睦は、幕末の外交を支える重要人物としても知られ、殊に蘭学教育においては全国に名を馳せるお度の勢いがある藩であった。大藩の影響は見いだせず、佐倉藩独自の学問への方向性の中で、儒学の礼楽を教授する目的から、音楽教習を実施していた可能性があったのではないかと考える。

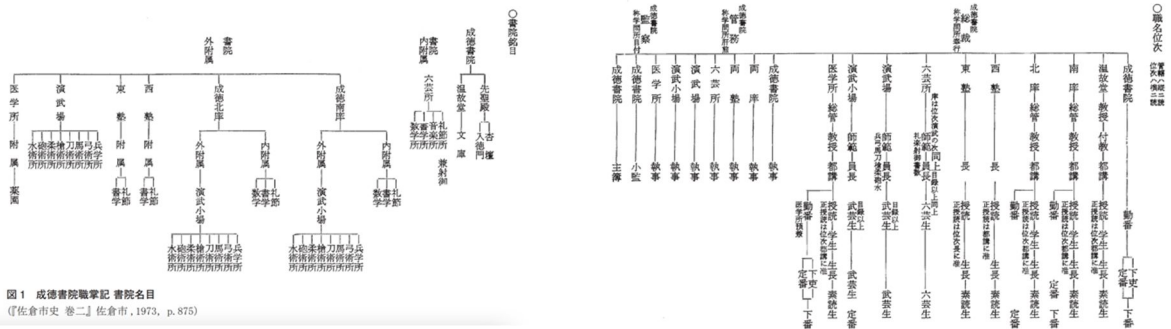


図1 成徳書院職掌記 書院名目
〔佐倉市史 巻二〕佐倉市, 1973, p. 875)

4.5 研究結果と今後の展望

全国に名を馳せた水戸藩校弘道館と熊本藩校時習館の、他藩校への影響は甚大であった。音楽教習の面から見ても、4.2に挙げたように、弘前藩校弘道館・高松藩校講道館への影響が見て漏れた。ただし、この2校は、同時に徂徠学の影響も見ることができる。この、大藩の影響と徂徠学の影響のどちらが強く働いたのかは、まだ分析しきれていないこと、これらの影響は、この2校以外にも働いたであろうことは容易に推測できるが、他藩では音楽教習に至らなかったことなどを勘案すると、やはり設立当初の主要人物に依るところが大きいのかもかもしれないとも考えられる。このあたりについては、他藩の状況も調査しつつ、更に研究を進めていきたい部分である。

一方、この大藩と徂徠学という影響がほとんど見受けられないにも関わらず、音楽教習を行っていた藩が、赤穂藩校博文館と佐倉藩校正徳書院であった。この2校をから考えられるのは、開設当初の理念であろう。ただし、赤穂藩校博文館は、赤松滄洲という人物がキーパーソンとなっており、若干の徂徠学（折衷学派）の影響は見取ることができる。一方で、佐倉藩校正徳書院には徂徠学の影響は見取ることができなかったが、音楽教習は他藩と比較してもかなりしっかりと教育内容の主要教科として捉えられていたことも判明した。今回の研究では、他藩との比較もあり、同藩の資料を深く読み込むことができているので、これも今後の課題としたい。

音楽教習は、儒学の礼楽思想を背景に、講堂（聖堂）の積奠で用いることを目的として教習されていることは、これらの藩校教育から読み解くことができた。それでは、なぜ他の多くの藩校ではそれを実施しなかったのかについても、今後検討していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 武内恵美子/周耘	4. 巻 2
2. 論文標題 古琴東伝史実と日本琴楽現状	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽文化研究	6. 最初と最後の頁 6-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 武内恵美子	4. 巻 1
2. 論文標題 弘前藩における楽実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世日本と楽の諸相	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武内恵美子	4. 巻 14
2. 論文標題 岡山藩学校と浦上玉堂の雅楽知識	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本伝統音楽研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 武内恵美子	4. 巻 2018年第3期
2. 論文標題 藩校的“楽”実践 以弘前藩校稽古館為例	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽文化研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武内恵美子	4. 巻 14
2. 論文標題 岡山藩学校と浦上玉堂の雅楽知識	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本伝統音楽研究	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 Theory and Practice of Music for the Samurai Class During the Edo Period - asayake.tsuyoshi@gmail.com an Example Hirosaki Domain
3. 学会等名 国際シンポジウム「雅楽の文化史」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 The Creation and Reconstruction of Saibara in the Edo Period
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 日本における藩校の楽
3. 学会等名 山東大学威海校招待講演(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 弘前藩と音楽－藩校・藩主の楽思想と楽－
3. 学会等名 国際歴史シンポジウム研究報告と討論「近代移行期の「音」文化」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 在日本的古琴的礼楽史和受容
3. 学会等名 浙江音楽学院講演
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 東臯心越将来携来之琴与日本の模造琴製作－総州原豊所制古琴之探討
3. 学会等名 中日音楽比較学術研究会議
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 Theory and Practice of Music for the Samurai Class During the Edo Period As an example Hirosaki Domain-
3. 学会等名 ASPAC 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 The Sekiten Music a comparison between Kyoto Gakuso and Hirosaki Domain Gagaku band
3. 学会等名 AAS in Asia Kyoto 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 武内恵美子、小島康敬、小林龍彦、平木實、渡辺信一郎
2. 発表標題 礼楽思想の諸相
3. 学会等名 日本音楽学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 武内恵美子
2. 発表標題 日本の儒学と楽思想の展開
3. 学会等名 山東大学芸術学院 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------